

《眼科臨床エキスパート》 所見から考えるぶどう膜炎

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信, 天野史郎 シリーズ編集
園田康平, 後藤 浩 編

本書は《眼科臨床エキスパート》という新シリーズの1冊である。「ぶどう膜炎」というと、眼科臨床の中では「困った……」という症例が一番多い分野ではないだろうか。症状から一目瞭然で、すっきりと治療に反応する患者さんも結構多いが、一方で、なんとなくステロイドで軽快してしまう患者さんや、ひと通りの血液検査や全身チェックなどでは原因がわからず、ただだらと経過を見ている患者さんも多い。

園田康平先生と後藤浩先生が編集された『所見から考えるぶどう膜炎』を一読し、ぶどう膜炎の診療は、まず正確な所見を取ること、得られた所見を的確に解釈できる知識を持つこと、鑑別診断すべき疾患をできるだけ多く思い浮かべられるようにすることの大切さを教えられた。

最初の「診療概論」ではぶどう膜炎を見る時の基本的な考え方が詳細に述べられている。それに続く、この本の3分の1以上のスペースを占め、重点の置かれた「総論」にはさまざまな眼所見が詳しく記載されている。検査所見の読み方や、鑑別診断の考え方などが随所に述べられており、そこまで読み終えただけで「ぶどう膜炎のエキスパート」になった気にさせられてしまう。それに続く「各論」でその肉付けをするという構成が素晴らしい。

分担執筆であるにもかかわらず、鑑別診断に重点を置いた記載や、所見の読み方や考え方など、統一性がよく取れている。解説に沿った写真やOCT、図なども

随所に配置され、綺麗でとても見やすく、実際に診療をしている気分になる。病態の理解に対する理詰めでもわかりやすい解説が印象的であった。

各論ではまれな疾患にも十分なスペースが配分されている。10年前、20年前には聞かなかった疾患名も増えている。座右において教科書としても便利に調べられるし、いろいろな疾患の典型的な写真を見るだけでも十分に臨床に役に立つ。

ぶどう膜炎外来を標榜している大学病院と、眼科クリニックの一般外来でみる症例群との間には大きな隔たりがあるという暗黙の理解は以前からあったが、本書ではこの点にも触れられており、一般外来をこなしている多くの読者に対する配慮がうれしい。

最近のネット社会の発達により、断片的な知識ならいくらかでも簡単に手に入るようになり、われわれ眼科医と対等あるいはそれ以上の知識を持った患者さんも時折みかけるようになった。そんな時代だからこそ、新しい知見に基づいた総論や、所見のよみ方、病態に対する考え方を教えてくれるこのような本が望まれていた。ぜひ、ご一読をお勧めしたい。

愛知県眼科医会会長／安間眼科 安間哲史

B5 頁308 2013年

定価：本体15,000円＋税

[ISBN978-4-260-01738-1] 医学書院刊